

スイートコーンの定植作業を行なうNPO法人「さっぽろ農学校俱楽部」の会員たち。農場には15坪の個人区画もある(6月11日、北区屯田町で)。丘珠空港にほど近い25アールの畑で出勤前や休日の作業に励む高田康一さん(写真左下)

んど畠優先の生活ですよ。野菜は、やめたら、親戚から農家がいなくなつてしまう。「そうなるのならば、自分でやるしかないって思つたんですよ」とふり返る高田さんは、北大教育学部手始めはアパートでズッキーニのプランター栽培。「三本収穫でき、うれしかった。市主催の農業講座『さっぽろ農学校』や、北海道有機農協が開設した『農業塾』(現在は休止)も受講し、栽培などの理論を学び、現場での作業に励んだ。

○四〇五年の二年間、アパートの大家が所有していた畑を三百坪ほど借り、東区の住宅街の真ん中で二十種類ほどの野菜を作った。

「僕の世代は、親が農家をやっている人が極端に減っています。父は農家の息子で現役の教員ですが、おじたちが農業を

も、パワフルである。

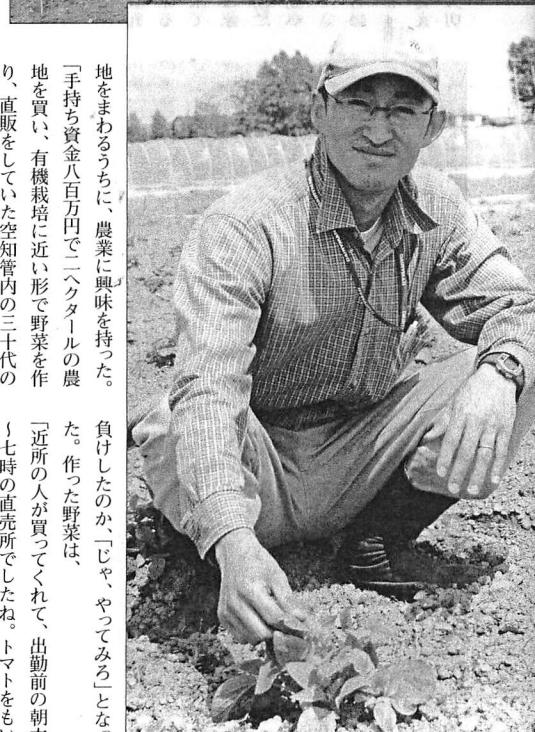
り、いまのところ農業で一本立ちしようとは考えていない。夏場はしばらく二足のワラジのような生活が続く。

「僕の世代は、親が農家をやっている人が極端に減っています。父は農家の息子で現役の教員ですが、おじたちが農業を

六年前に就職したのが農業関係の出版社。そこで発行する雑誌の取材で道内各

雑誌の取材で農業に開眼 手始めはプランター栽培

道都・札幌で産声あげる 「小さくても面白い農業」



2006.8.



2006.8.

ルポライター

滝川 康治

現場レポート

“農と食” 北の大地から

連載第45回

札幌で就農するための試み

出勤前に“借地農業”こなし 750坪の野菜づくりに挑戦

タマネギ畑や牧草地が広がり、丘珠空港を間近に臨むことができる札幌市東区の一角。このあたりは風が強く、粘土質の土壤のため、農業をやるにはけつこうきびしい土地のようである。

「飛行場を見ながら、トラクターに乗つて作業をするのは、気分がいいもんですよ。近所の農家から、「畑を耕す」プラウの方が違うよ」と教えてもらつたりして、僕が毎朝出かけてくる姿を見て、周囲の農家が認めてくれるようになるといつと思つています」

地をまわるうちに、農業に興味を持つた。手持ち資金八百万円で二ヘクタールの農地を買ひ、有機栽培に近い形で野菜を作り、直販をしていた空知管内の三十代の新規就農者からは、ずいぶん刺激を受けましたね」(高田さん)

手始めはアパートでズッキーニのプランター栽培。「三本収穫でき、うれしかった。市主催の農業講座『さっぽろ農学校』や、現在の目標は、丘珠での畑づくりを軌道に乗せること。収穫した野菜類はイベントなどで販売する。

自分自身の将来については、まだ結論が出ていません。個人なのか、NPOで仲間と一緒にやるのが分からなければ、なんらかの形で、札幌市内で農業を続けていきたいですね」

からの農業と会社勤めを両立させるバイトティの持ち主なだけに、五年後、十年後の暮らしづくりが楽しみだ。

笑顔でこう話すのは、サラリーマン生きたわら、車で十五分ほどかけて、自宅からここまで農作業に通う高田康一さん(1973年、旭川市生まれ)だ。

石狩市内の有機農家が地主から借りた一ヘクタール弱の農地を、五組の研修生が使う。メーリングリストで連絡を取り、糞を耕す。雲雀が多いので、「ヒバリーヒルズ」と命名。高田さんは、二十九歳アール(750坪)の畑でジャガイモや大豆、レタス、カボチャ、キュウリ、トマト、オクラなどを栽培している。

六月はこう過ごした。平日の起床は午前四時。七時ごろまでここで農作業をやつてから、背広に着替えて出勤。「夕方の作業はできないので、土日と祝日はほ

百八十万都市・札幌の農家戸数はこの二十年間で半減し、高齢化や後継者不足などの理由から遊休農地も二百へクタールに上る。その一方で、「農と食」に対する市民の意識が変化しており、生産と消費の現場をつなごうとする動きも——。「借地農業」に励む三十代の青年や、両者の現場を結びつけようとするNPO法人などの活動を通じて、札幌でのさまざまな就農の試みを紹介する。

研修、施設や機・資材の購入、地域とのつながりなど課題がたくさんあるからだ。とりわけ百八十万都市・札幌では、農地取得が難しい。ちなみに十アール（30坪）当たり農地価格は、南区の中山間で百八十万円、北区や東区の平野部になると一千万円もの高額になる、という。わたしが暮らす道北の過疎地では、牧草地だと五万円前後、水田や畑でも数十万円。月とスッポンである。

「それなら賃貸で…」といえば、農家側の警戒心が強い。相続の発生や宅地開発、公共用地としての買収などに対する不安感が大きいようだ。

借地農業をやつてきた高田康一さんは、「札幌では農地を安く買おう」なんて考え方には間違っている。農業を志すならば、レジャー的に楽しむのではなく、本気でやること。地主は農業をやりたい人がいたら使ってもらい、これまでのノウハウを伝えるような形で一緒にやれるになるのが理想的だと思いますね」

と、これまでの体験を踏まえて話す。

小さくても面白い農業へ 札幌のもつ可能性は何か

行政側から農業者として認定されるには、農地の最低面積基準をクリアしなければならない。北区と東区、手稲区は一ヘクタール、他の七区は三十アール。兼業農家などを志す人には壁が厚い。農業を担う人のすそ野を広げるためにも、いつそうの規制緩和が必要だろう。

「さっぽろ農学校」には毎年、定員を大幅に上回る応募がある。サッポロさとらんど内のは場でレタスを収穫する受講生たち（提供：市農政課※下の写真も）

「それなら賃貸で…」といえば、農家側の警戒心が強い。相続の発生や宅地開発、公共用地としての買収などに対する不安感が大きいようだ。

提案するのは市農政

課の高田洋さん。農家による「市民体験農園」が高齢化で運営が負担になつてきただ事例も増えており、その担い手としてのNPO法人に期待している、とも言う。

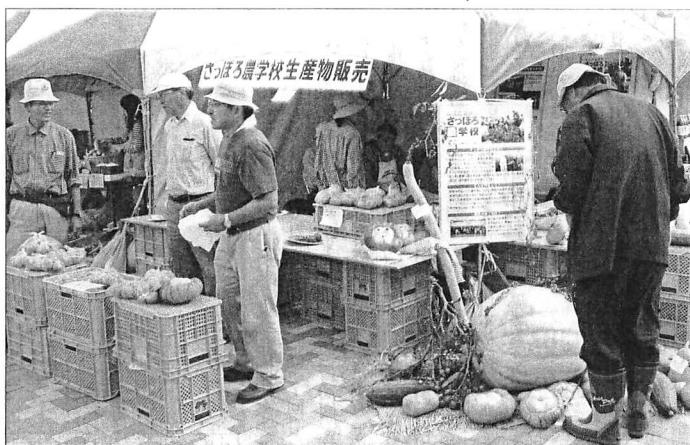
宮本さんがこう呼びかける。「一般の人に就農の志があつても、きっかけがないと実現できません。高齢者はNPOでコツコツと少面積でやつてみる、本格的な農業を志す若い人はどんどん就農してもらう——そのための手助けをしていきたい。『農学校』に入つて勉強したり、一緒に働いてみに触発され、「農」の世界に近づこうとする人が現れることを期待したい。

この連載でわたしは、北海道農業の主流を占めてきた、「大きいことはいいことだ」式の思考に疑問を投げかけてきた。

札幌市が市農政課として、市農政課は、その対極の「小さく

「スイーツの町にしよう」との動きもある

ので、その素材としてイチゴや小果樹のように思う。今回登場した人たちの実践



生産した野菜類は「さとの収穫祭」で販売実習を行なう

■「さっぽろ農学校」の連絡先

札幌市中央区北1西2 札幌市経済局農

圃011・211・2406